

今回の特別支援学校における介護等体験で私が学び得たことは、大きく分けて二つである。

一つは、先生方の熱心さである。一クラスあたりの生徒の絶対数は、約 10 人前後と少ないが、生徒一人一人さらには、他クラスの生徒のことまでよく理解していた。そして、その生徒がどこまでできるのか、どこから支援が必要なのかを瞬時に判断していた。時には、冷酷とも取れる判断を下している場面も見られたが、それが本人のスキルアップにつながっていることが分かった。それが、最も顕著に表れていたのが体育館で行われた全体説明会の時だ。ここでの静かさに先生方の血のにじむような努力の一端が表れていた。そんな生活指導の充実と共に、教科（授業）指導の充実も感じる事ができた。できるだけ分かりやすいように、全員が参加できるように、実に練り込まれて工夫されている授業だった。生徒が変わっても、先生のすることは変わらないということを学んだ。

二つ目は、障がいを持つ生徒への理解である。全てではないにしろ「10才が3才レベル」の考え方はそのものだった。他の生徒に実習生を取られて拗ねている生徒、実習生が気になって全く集中していない生徒、その他にも様々な特徴の生徒がいた。そして、こういった生徒たちに対しては、関わり方を工夫すれば、とても良い方向に持っていくことができるということもわかった。

ここでは、本当にたくさんのことを学ばせていただいた。これらの経験を十分に活かした教育を心がけて教壇に立ちたいと思う。

以上